

人権なら

2025年3月1日

第171号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

脱原発こそが唯一の安全策

大震災から14年。被災者の苦しみは今も続く

2万人もの尊い犠牲者を出した東日本大震災と、それに起因した福島第一原発事故から14年が経つ。原発事故では今も3万人程の避難者がいる。被災者は家族も家屋も土地も故郷も失い、苦しみが続く。



だが、政府・電力会社は3・11の教訓を忘れ去り、原発回帰に突進する。「エネルギー基本計画」で「原発の最大限活用」を打ち出した。「原子力緊急事態宣言」も解除できていないのだ。

現在、50年超の老朽原発を含め、12基が稼働する。原子力マフィアは次世代革新炉の開発・建設に加え、「想定していない」と繰り返してきた新增設・リプレース(建て替え)までも踏み出そうとしている。

原発は危険極まりないことを示した能登地震

昨年(2024)の元日、能登半島で震度7の大地震が起きた。志賀原発は冷却電源が停止。変圧器が爆発し、汚染水が漏れた。幸い稼働停止中だった。反対運動で頓挫した珠洲原発が無かったこともあって、第二のフクシマは免れた。誰もが震災の恐ろしさを再痛感した。

能登被災地救援への政府対応は鈍い。地元からは見捨てられたとの声上がる。被災者は大災害に遭っても救済されない。自助努力を求められるだけだ。

汚染水の海洋放出に続き、汚染土も撒き散らす

東京電力は一昨年からの汚染水の海洋放出に続き、今度は汚染土をばらまく方針だ。原発周辺に設けた中間貯蔵施設にある1400万m³の大量の汚染土を

2045年3月までに県外での最終処分を図る。

どんな処理をしても除去できない放射性物質トリチウムを含む放射能を各地に撒き散らすこととなる。

原発は即、停止し、廃炉にすることが不可欠

原発は膨大な放射能を生む。無毒化できない。人間が制御できない代物なのだ。原発は放射線や熱の影響で設備も劣化する。「核燃料サイクル」は行き詰まっている。「高レベル放射性廃棄物(核のごみ)」の最終処分地も決まらない。行き場のない猛毒のプルトニウムを次世代に押し付けることになるのだ。

巨大地震が何度も襲う地震大国、日本。なのに、政府は危険極まりない原発を手放そうとしない。政府、電力会社は被災者の生命、生活を奪っても、責任も負わない。ごまかしの避難対策で安全策を講じたとして再稼働に走る。安全策は脱原発以外にはない。原発は即、停止し、廃炉にすべきだ。

確定申告相談会を実施

諸物価の高騰で事業者泣かせの相談が大半に

2024年分確定申告相談会は2月5日から25日まで県内9か所で行った。写真。大勢の会員が訪れ、相談を受けた。中小企業者協会の会員を対象にした相談会も2月26日から開始。3月10日まで続く。



相談会では、会員から、インボイス制度の導入で消費税分の計算が煩わしい。諸物価の高騰で経営が厳しさを増している。中小企業は大企業と違い、赤字経営を強いられている、などの声が寄せられた。

当事者は土の中の世界状態

「なら人材育成協会」がひきこもりの研修会

「一般社団法人なら人材育成協会」は1月25日、天理市文化センターでひきこもり当事者・家族・支援者・関心のある人を対象に研修会を開いた。「一般社団法人ひきこもりUX会議」代表理事の林恭子さんが当事者の視点から講演した。

林さんは、高校2年生の時、締め付けの厳しい管理教育に対する違和感から深刻な身体症状が現れ、不登校になった。その後、10年以上ひきこもった。26歳からの2、3年間は最もつらく、起きている間、ずっと自分を責め続けた。

ひきこもりの当事者が住んでいるのは土の中の世界。息もできない。真っ暗。とにかく苦しい。ごろごろしているようでも、頭の中は一瞬も休まずに自分を責め続ける。心の中はボロボロで、クタクタ状態だった。



安心できる場所の確保と見守る体制をつくる

30代で信頼できる精神科医と出会う。思っていることを初めて言葉にした。気力を取り戻していく中で、生きづらい世の中を何とかしたいと思うようになった。

40代からは仲間ができ、自助会の企画・運営などを行う「ひきこもりUX会議」を始めた。現在は自治体と協力しながら、「ひきこもりUX女子会」で活動する。

ひきこもりは15歳から64歳までの年齢層の2%余り、146万人に上る。ひきこもりになった主な理由の一つには「新型コロナウイルスの流行」もある。コロナ禍での社会環境の変化が背景にある、と語った。

ひきこもり者との接し方について、家族から質問があった。林さんは、ひきこもり者へのNGワードは周囲と比べることや、プレッシャーをかけること。OKワードはリビングでのトークや、家族の一員として普通に接するなど、安心できる場所の確保と見守る体制をつくること。そして、家族も自分の人生を生きることだ、と。

地域で暮らす・つながる地域に

第21回ハンセン病問題講演会でシンポジウム

第21回ハンセン病問題講演会が2月15日、大阪・阿倍野区民センターであった＝写真。テーマは「ハンセン病問題から考えるソーシャルインクルージョン～地域で暮らす・つながる地域になるために」。



第1部は邑久光明園ソーシャルワーカーの坂手悦子さんが「ハンセン病問題の基礎知識」を提起。第2部は写真家の小原一真さんが「ハンセン病回復者・家族と出会うということ」と題し講演。災害やコロナパンデミックの最中、ケアされるべき人が差別される問題からハンセン病問題と出会い、求められるべきコミュニケーションに向き合ってきた、と写真説明を交え話した。

ハンセン病問題からソーシャルインクルージョンを

第3部はシンポジウム。パネラーは坂手さんと、兵庫県川西市社会福祉協議会の高田浩行さん。コーディネーターは大阪市社会福祉協議会の永岡正巳さん。

永岡さんはソーシャルインクルージョン(社会的包摂)について説明。「差別と偏見、社会的孤立の多くの課題を地域福祉と社会的包摂の展開として、どのように取り組むのかをハンセン病問題から学び考えていきたい」と。坂手さんは「差別と偏見と隔離政策で社会的孤立を強いてきたハンセン病問題は社会的排除の最たるもの。すべての人権問題が凝縮しているからこそ、ハンセン病問題の普遍化を」と。

高田さんは、社協は地域福祉の中間的支援組織としての活動に注力し、「住民の参画と繋がりを深め、社会的排除をなくす役割を深めたい。ハンセン病支援センターが果たす役割に学び、住民への福祉力を支える。差別・偏見は自然治癒しない。社会が変わらなければならない」と。3人の発言を受け、屋猛司・邑久光明園入所者自治会長らが質疑。討論した。

菊池事件の再審実現に向けて

徳田靖之弁護士の講演に300人が聴き入る

ハンセン病差別による冤罪事件である菊池事件の再審実現に向け、弁護人である徳田靖之・弁護士の講演会が2月23日、東大寺金鐘ホールであった＝写真。300人が参加。熱心に聴き入った。講演会は「差別をなくす奈良県宗教者連帯会議」などの実行委員会が開催。NPOなら人権情報センターも実行委に加わった。



ハンセン病差別に基づく誤った裁判で死刑に

菊池事件とは、1952年、熊本県で起きた元村役場職員の殺害事件をめぐって、ハンセン病患者として通報されたFさんが逮捕。菊池恵楓園内の「特別法廷」で死刑判決が下された。第3次再審請求も棄却され、その翌日、死刑が執行された。

熊本地裁は2020年、人間の尊厳を侵害した「特別法廷」は憲法違反と認定。だが、再審請求権を有する検察庁は請求を拒否。市民が主権者となって第4次再審請求をしている。続けて、親族も請求している。

隔離政策の過ちを糾す決意で闘っている

徳田弁護士は「らい予防法違憲国賠訴訟」で国の隔離政策の過ちを認めさせるなど、ハンセン病問題の解決と回復者らの人権確立に取り組んできている。

星塚敬愛園の島比呂志さんや菊池恵楓園の志村康さんらと出会い、ハンセン病問題への「不作為の罪」を自覚。隔離の過ちを糾す決意で闘っている。

本事件は司法の加担責任が問われる。死刑が執行されてしまったため、死刑制度の根幹に触れる再審請求は壁が厚いと。また狭山事件や袴田事件と同様、証拠の捏造、身内の証言誘導などにも触れた。

最後に、多数の参加に感謝の意を表し、多くの声を裁判所に突き付けることが再審の力になると訴えた。

二つの国にまたがって生きる

済州島4・3鎮魂劇「流民哀歌」が大阪で再演

「済州4・3鎮魂劇『流民哀歌』—四月よ、遠い日よ」の公演が2月2日、大阪・生野区の在日韓国基督教會館であった。在日本済州四・三犠牲者遺族会が主催した。

この作品は済州島4・3事件の最中、「おまえだけでも生きる」とオモニに日本行き密航船に乗せられた少女が、たどり着いた猪飼野で生きてきた物語。きむきがんさんが脚本・演出・出演する。



きむきがんさんが脚本・演出・出演の1人芝居

「椿の花と靈魂たちの歌が恨(ハン)を乗せた船から聞こえてくる。密航、祖国分断、帰国事業、オモニハッキョ…命をかけて渡ってきた猪飼野と月よりも遠かった故郷チェジュ」

「二つの国にまたがってたくましく生きるサムチュンたちの胸には、四・三の痛みと当時夢見た「新しい祖国」への希望が今も生々しく刻まれている」



「私たちのルーツは済州島(チェジュ)にある」

「四月よ、遠い日よ。泣くことすらできず、話すことも、声を出して訴えることもできなかった年月。恨(ハン)を乗せた船は希望を乗せた船。私たちの 뿌리(ルーツ)はこうしてチェジュにある。今、誰かに話したい」

作品は昨年(2019年)の第76回在日本済州四・三犠牲者慰霊祭(大阪・統国寺)で初披露。その後、8月の京都公演、済州島各地を巡回公演した。この日は大阪での再演。きむさんの渾身の演技と語り、頬をつたう涙とともに、笑いも起きるパワフルな舞台に胸を打った。



東京高裁は再審開始を！

狭山事件の再審を実現しようと市民が集い

「第9回狭山事件の再審を実現しよう 市民のつどい in 関西」が2月24日、大阪・西成区民センターであった＝写真。会場超満員の380人が集い、狭山再審勝利への決意を固めた。



上川多実さんが「部落問題の現在から見る狭山」

部落問題の発信活動をする東京在住の上川多実さんが「部落問題の現在から見る狭山事件」と題し記念講演。「石川さんに見えない手錠を掛けているのは誰？」と問いかけ、「マジョリティ特権」をキーワードにして説明。「私たちが動かないから今がある。みんなで考えなければならない」と語った。

このあと、山田哲生・兵庫県連狭山闘争本部長らとトークセッション。日常の中にある「マイクロアグレッション(無自覚の差別行為)」について話し合った。

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

国会の景色が変わった。これまでの自公多数政権下では、まともな予算審議が見られなかった。「数の力」による原案通りの可決が常態だった。やっと無駄な歳出にメスが入った。野党は115兆円超もの新年度予算案の見直しを迫る。たとえば、「防衛装備移転円滑化基金」。過去2年度と同様、新年度案でも400億円を計上。残高800億円をさらに積み増す。また、賃上げなどの政策を進めるためとした企業への税金を安くする「租税特別措置」。法人税の優遇措置だ。2023年度は少なくとも1兆7338億円も減額。他にも、生活苦に喘ぐ民には不必要な軍事費の大幅増など色々ある。無駄な歳出の削減と、大幅減税を断行し、弱者に優しい予算編成に組み換えるべきだ。

石川・青木・西山・袴田・林さんらがアピール

冤罪被害者がアピール。東住吉事件の青木恵子さん、湖東記念病院事件の西山美香さんの2人がそれぞれの事件を報告し、未解決冤罪事件の無実を晴らしていく決意を表明。袴田事件の巖さんの姉、ひで子さんと、和歌山カレー事件の林眞須美さんの長男はビデオメッセージを寄せた。

石川一雄さんと早智子さんもビデオでメッセージ＝写真。狭山事件は62年目を迎える。「今が正念場。今年こそ山を動かすとき」と語り、一層の支援を訴えた。



徳田靖之弁護士が狭山と菊池の共通点を指摘

徳田靖之・弁護士が特別アピール。「狭山事件と菊池事件－冤罪としての共通の構造を探る」と題し、部落やハンセン病への差別、警察の失態、証拠の捏造などの共通点を指摘。狭山事件、菊池事件の無罪を勝ち取ることで司法のあり方を変えようと訴えた。

大石あき子・衆院議員と大椿ゆう子・参院議員がアピール。そのあと、「カオリンズ」と「アカリトバリ」によるライブがあった。歌「真実・事実・現実 あることないこと」などを披露。会場を盛り上げた。

終了後、新今宮駅前までデモ行進した＝写真。

冤罪事件では、福井中3殺害事件と日野町事件は再審開始が決定。袴田事件に続き、狭山、菊池、大崎事件、飯塚事件、名張毒ぶどう酒事件などの再審を実現させ、全被害者の無実を晴らさねばならない。



ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/